

# 音楽劇 母さん

俳優座劇場プロデュース  
No.113



## 【六〇代】

▼母に対する取り返しのない我がまま。サトウハチローの中に自分を見たとき、涙を抑えることができなかつた。(男性)

▼やはり母親ですね。子供のころのかくまきを思い出します。涙でした。(女性)

▼生活破綻者という話を聞いた事があつたけど、あの素晴らしい詩とあまりにもチグハグで理解できなかつた。あんなふうにとゲトゲト生きて行くのは、辛いだらうな...と思う。(女性)

▼今回は、土居裕子さんの美しく澄んだ歌声を聴くことができ、それだけで満足感いっぱい。八郎の母親役も娘役も両方良かったと思う。ただ、出演者が何役もこなす慌ただしさや、時間が過去・現在を頻繁に行ったり来たりする分かりづらさ、あるいは踊りのシーンが必要だったのかなど、いろいろと注文を付けたくなるところもあつた。また、八郎の自分の気持ちを素直に伝えられないあまのじゃくなところや、破天荒過ぎる生き方にはあまり共感できなかつた。(男性)

▼ピアノとバイオリンの生演奏で、よく知っている曲が流れてとても良かった。サトウハチローの生涯がこんなに激しい家族との確執があつたとは！素直に表現できなかつた母への愛情が、多くの詩を生んだのかもしれません。(女性)

▼感動した。最後のシーン、黄色の花の中にハチローと母さん。大好きだった母さんと二人のやりとりで涙が出た。

▼土居裕子さん始め、皆さんの歌声がとても素敵でアンサンブルも聞きごたえがありました。生演奏も良く、コンサートに来ているようでした。配役もそれぞれとても合っていたと思います。観終わつた後もずっと余韻が残るいい芝居でした。やさしい詩が多いサトウハチローさんの心中は

かばかりだったのか、想いをめぐらせながら観ていました。(女性)

▼バイオリンと歌の調和がとれていて、楽しめました。欲を言えば、ピアノだったらと思いました。(女性)

▼詩人というのは、苦悩を昇華させていく作業なのかもしれない。(女性)

▼子は親を選べぬ。運命の家族の中で苦悩した八郎。だからこそ、詩のなつかしさと悲哀。日本の心と涙。(女性)





【七〇代】

▼「長崎の鐘」を聴く度に、「本当にサトウハチローの作詞か!!」と疑問を持って来たが、ハチローの人生から理解が得られた。生の演奏・合唱が、ステージをふくまらせていたのではないだろうか？

(女性)

▼詩は優しいのに、日常生活がハチャメチャで、母を恨んで納得いきません。心の奥底と体が不一致？懐かしい唱でした。

(女性)

▼綺麗な詩と歌声と演奏。確かな演技。ミュージカル苦手の私にも音量が快く楽しめた。ハチローの葛藤が切なく淋しく、生命のほかなさを感じた。

(女性)

▼音楽劇でもこんなに歌が入らなくても良いのでは、と思いつつ聞いていたが、歌と歌の間音楽の余韻が残っているとき、時折セリフが聞きづらいところがあった。父親に反発していたわりに同じことをするのはなぜか、私にはわからないが、こんなにも素敵な詩が書けるのも、生い立ちのせいでしょうか？舞台も素敵でした。ピアノがいつの

間にか出て来たのでびっくり。あとで聞いた話では、本物ではないそうだ。最後も一瞬にして菜の花畑、素敵でした。

(女性)

▼歌声がきれいで引き込まれましたが、ちよつと長くて疲れました。サトウハチローの生活を細かく表現し過ぎでは。

(女性)

【八〇代】

▼土居裕子さんの歌声の美しさとバイオリン・ピアノ演奏のハーモニーに感動しました。詩人さんの声強すぎて耳障り、凄く残念でした。

(女性)

編集スタッフから

主人公の母への接し方に共感できなかったり、だからこそ生まれた詩なのではという意見もありました。様々な感想を目にするとき、「発表の場が設けられてよかった」と思います。このスペースが鑑賞の触媒となって、観劇後の話題のきっかけになればいいですね。